

第 22 回 GSJ シンポジウム 「アカデミックから身近な地質情報へ」開催報告

渡部芳夫¹⁾・栗原文夫¹⁾・中澤都子¹⁾

1. 地質調査総合センターの成果普及：GSJ シンポジウムでの新しい試み

地質調査総合センター（GSJ）では、研究成果の普及のために多くの活動をしています。専門的な成果をお伝えする形で開催してきたのが、GSJ シンポジウムです。第 1 表にあるように、これまでの 21 回は、GSJ の研究開発の最先端成果ないし最大の社会課題について、あらかじめ見定められる受け手の皆さんにお伝えする場として設けられてきました。一方では、それらの課題や地質自体に触れたことのない受け手の皆さんを視野に入れることは、かなり困難なのです。GSJ では引き続き、研究の成果普及とアウトリーチの立ち位置や受け手の整理について、試行錯誤を続けています。なにより困難な、今見えていないカスタマーや社会そのものに、どのようにして繋がっていくかという課題は、研究開発そのものではないがために、容易に解決できそうもありません。

一方、産総研地質の調査ミッションを実施している GSJ には、国の知的基盤としての地質情報整備・発信が求められており、2013 年春より、2010 年からの 10 年間の知的基盤整備計画の審議が始まっていました。その詳細は本誌牧野 (p. 72) に譲りますが、国の知的基盤という意味は、“政府の” という意味だけではなく、“国民全員の” という意味を含みます。従って、今回の審議で、従来の産業育成等の知的基盤のコンテンツ整備に加えて、次期計画では国民全般へのわかりやすさと認知を求められたのも必然と言えるでしょう。

今回のシンポジウムは、このような背景のもとで企画されました。専門家による専門家のための専門内容のシンポジウムとは趣を変えて、専門家ではない社会の一般市民を対象に、楽しみながら知っていただき、そして使ってみようと思っていただくことを目標に、従来のシンポジウムにはなかったいくつかの試みを行いました。本稿では、それらのいくつかについてご紹介し、開催時の反響についても触れたいと思います。

2. 開催会場と日時

従来の GSJ シンポジウムは、ほとんどウイークデイの全日を使って開催されてきました。これは、技術者継続教育プログラム（CPD）の一環として、企業等の技術者の方が社命で参加されやすい利点があり、社会人（専門家）の方の参加には好都合でした。もちろん、主催側の GSJ 職員としても振り替え休日等の手続きも不要なので、双方の利にかなっていたのです。しかしながら、今回想定する社会人の方々は、必ずしも平日 1 日を費やせるとは思えません。可能性としては、中高生等の皆さんの、平日昼間の参加も想定したいところです。そこで、事務局の方々には負担を与えてしまいましたが、週末土曜日の午後に設定することとしました。また会場も、次に説明する実体験デモンストレーションを同時に行いたかったので、通常の講演会場ではなく、連続したフロアをいくつか区切れる場所を探していただきました。

その結果、開催日時は 2013 年 11 月 30 日（土）13:00～17:30。会場は、東京駅前の八重洲通り沿い「AP 東京八重洲通り」のワンフロアを借り切ってと決まりました。東京駅周辺はオフィス街ですので、土曜日では通りがかりの参加者は期待できそうもありませんが、会場の条件は完璧で、本誌グラビア (p. 65～68) にあるように、講演会場とデモンストレーションフロアを連続させて確保しつつ、間をパネルカーテンで開閉することが可能となりました（第 1 図）。

参加事前登録は 101 名でしたが、当日は、講演会場席がほぼ満席になり補助椅子を追加し、最終的には内部説明者も含めると来場者数は 120 名あまりになりました。従来の学会や業界ルートの参加者がほとんどおられないシンポジウムとしては、合格点は取れたと思います。

3. 講演内容とデモンストレーション

今回のシンポジウムは、「アカデミックから身近な地質情報へ」のタイトル通り、あくまで身近なものとして受け

1) 産総研 地質調査情報センター

キーワード：GSJシンポジウム、地質情報、成果普及、アウトリーチ

第1表 GSJ シンポジウムの開催史. 本表は、以下のサイトから転載しています. 産総研地質調査総合センター, GSJ シンポジウムのページ (<https://www.gsj.jp/researches/gsj-symposium/index.html> 2014/01/20 確認).



No.	タイトル	日時	会場
第22回	アカデミックから身近な地質情報へ	2013年11月30日	AP 東京八重洲通り 11F
第21回	古地震・古津波から想定する南海トラフの巨大地震	2013年7月10日	秋葉原ダイビルコンベンションホール
第20回	地質学は火山噴火の推移予測にどう貢献するか	2013年1月22日	秋葉原ダイビルコンベンションホール
第19回	社会ニーズに応える地質地盤情報—都市平野部の地質地盤情報をめぐる最新の動向—	2012年1月31日	日本大学文理学部百周年記念館
第18回	地質学で読み解く過去の巨大地震と将来の予測—どこまでわかったか—	2012年1月12日	秋葉原ダイビル
第17回	地質地盤情報の法整備を目指して	2011年2月28日	東京大学小柴ホール
第16回	20万分の1地質図幅完全完備記念シンポジウム—全国完備後の次世代シームレス地質図を目指して—	2010年11月16日	秋葉原ダイビルコンベンションホール
第15回	古地震と現在の地殻活動から地震を予測する—産総研活断層・地震研究センターが目指す地震研究—	2009年7月2日	秋葉原ダイビルコンベンションホール
第14回	地質リスクとリスクマネジメント (その2)—海外の事例と国内での新たな取り組み—	2009年6月15日	東京大学小柴ホール
第13回	海域・沿岸域の資源・環境・防災—持続的発展に向けた海洋地質研究—	2009年2月26日	秋葉原ダイビルコンベンションホール
第12回	地下水と岩石物性との関連の解明 ~産総研のチャレンジ~	2008年5月8日	秋葉原ダイビル 5階カンファレンスフロア 5B 会議室
第11回	地下水のさらなる理解に向けて ~産総研のチャレンジ~	2008年3月19日	秋葉原ダイビル 5階カンファレンスフロア 5B 会議室
第10回	地質リスクとリスクマネジメント—地質事象の認識における不確実性とその対応—	2008年3月11日	秋葉原ダイビル 5階カンファレンスフロア 5B 会議室
第9回	地質学的手法による火山活動予測—火山災害の軽減を目指して—	2007年12月19日	秋葉原コンベンションホール
第8回	公共財としての地質地盤情報—ボーリングデータの整備と活用—	2007年7月25日	秋葉原コンベンションホール
第7回	地質学から地震の予測を目指す—産総研における地震研究—	2007年6月11日	秋葉原コンベンションホール
第6回	地質情報の社会貢献を考える	2006年11月14日	秋葉原コンベンションホール
第5回	社会のための地球科学—日本とドイツの地球科学における交流— [日本におけるドイツ 2005/2006]	2006年1月25日	産業技術総合研究所共用講堂 (つくば)
第4回	次の南海・東南海地震にどう備えるか [震災対策技術展神戸会場内]	2006年1月17日	神戸国際展示場会議室
第3回	付加体と土木地質—地質図の有効性と限界—	2005年11月29日	秋葉原コンベンションホール
第2回	地震考古学の果たす役割	2005年6月29日	東京コンファレンスセンター (飯田橋)
第1回	高く乏しい石油時代が来た	2005年6月28日	日本学術会議講堂

止めていただくことが最大の設定です。従って、専門家向けの講演に慣れた講演者の皆さんには、社会から見えるGSJの成果物を棚卸しして、そのバラエティーと用途について理解していただけるような、講演課題と説明の仕方を徹底してお願いしました。詳しくは本誌の別項にそれぞれの皆さんが書いていますが、当日の企画としては、シンポジウムを一貫して、レイアウトやデザイン、色調や言葉遣い等を、スライドやパネル、ポスターについて統一することにしました。従って、聴衆の皆さんには、バラバラの専門家が次々に話しをするという感覚は、ほとんどなかったのではないかと思います。

配信側のGSJ職員のプレゼンテーションだけでは、初

対面の市民の皆さんにどれだけ客観的な価値を感じていただけるかは不安です。そこで今回は、市民生活における土地の価値について、コンサルタントならびに講演活動等に幅広く活躍しておられる、東京情報堂の中川寛子代表に招待講演を依頼しました。地理学会員でもおられる同氏は、不動産の価値を一般市民が評価する際の地質情報の利用について、これまでもシームレス地質図の利便性等を紹介してこられた方です。

さらには、これらがわかりやすいプレゼンテーションであっても、やはり理解や集中力は十分に確保できないとの認識がありましたので、会場そのものに実体験をしていただけのデモンストレーションエリアを隣接することにしま

した。これについては、本誌で宮崎 (p. 95 ~ 96) が報告していますとおり、従来のシンポジウムのポスターセッションとは段違いの規模のものとなり、用意したのもも実物、つまり触れたり操作できるものを中心として、今回のために新たに制作したのもも多く、実際の開催準備の大半の手間が、このデモンストレーションエリアに費やされました。

当日は、来場者の皆さんの反応を見つつ、デモンストレーションの時間を進行時に調整して、予定にないプレビュー時間を早めに設けたことも加味して、皆さんのデモエリアへの興味は最後まで尽きませんでした。

4. 広報と配布物

今回のシンポジウムは設定や内容を踏まえ、学会講演要旨集の体裁に似た当日配布物はやめて、グラビア (p. 68) にあるようなパンフレットを作成しました。A2 両面カラーの16面折という体裁は、もちろんGSJシンポジウム初めてのものですが、当日配布物ではなく、シンポジウム広報開始時の10月にはPDFとしてホームページに掲載された点でも、従来とは大きく異なります。もちろん印刷物は当日配布しましたが、来訪者の方にとっては、当日用意されている詳細な内容を事前に知ることができました。一方で主催者側としては、通常よりも2ヶ月前倒しで出版内容を用意することとなり、これはこれで大変でしたが、秋の学会、オープンラボと引き続いた繁忙期にも、準備が段階的に進んでいく実感を得ることができました。

5. 新たな試みを終えて

地質図というものは、ごく普通の市民の方が初めて接すると、非常に価値がわかりにくいものです。この点は今回も再認識しました。ですから、専門家が〇〇のために作った図ですという説明は無効です。むしろ、こう使うと楽しいです、役立ちます、儲かります……等の、専門知識も技術もいらない説明力というものが、実に大切でしょう。

別の言い方をすれば、一目見て目に止まらないものは、売り込まなければ放置されるということになります。ですから、出版しました、HPに掲示しましたというスタンスは、私たちを見ているごく少数のカスタマーにはサービスとなり得ますが、普通に通り過ぎて行く人々にはサービスになっていません。

一方、今回のシンポジウムでさらに思いを深めたことがあります。これまで研究成果普及としてきたことが、手取



第1図 上：講演時のメイン会場（定員120名）下：メイン会場の背後に事前設置された、ほぼ同規模のデモンストレーションエリアがオープンしたところ。両写真撮影：谷島清一。

り足取り使い方をお見せして、ただ手にしてもらえれば使ってもらったこととなるような理解があったのですが、もう時代は変わってしまったと感ずきます。これからはむしろ、我々が知恵を絞って使ってもらおうとお見せしている英知や視野の向こうに、きっと地質情報をイノベーションに繋げてくれる人々がいるはずだと信じて、どこにいるか分からない彼らの手に届くよう、研究成果を発信し、社会に漂わせる方が良いのだという思いが強くなっています。実はこれと同様の判断があって国のオープンデータ化の施策が急速に進んでいます。従来通りのアウトリーチよりも、この意味での成果や情報普及の方が、奥深く、かつ、ぶれが許されない道のように思いました。

謝辞：本稿は今回のシンポジウム開催報告という位置付けですので、従来にない形式や規模、準備期間でシンポジウム開催に向けた支援や事務局業務を担っていただいた、地質標本館の住田達哉氏を始めとする皆様に感謝します。また、実体験デモンストレーションという試みについて、4エリアで企画・準備・実演・運営等を担当いただいた各研究ユニットの諸氏にも謝意を表します。

WATANABE Yoshio, KURIHARA Fumio and NAKAZAWA Miyako (2014) 22nd GSJ Symposium Report "From academic to socially familiar Geoinformation"

(受付：2014年1月20日)